

(3) 久慈川の特徴的な地形

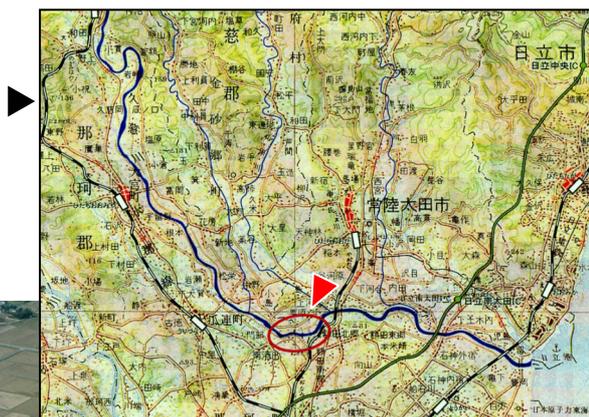
1) 三日月湖(常陸太田市, 那珂市)

大河川が平野部に入り、流れが遅くなると川は側面を侵食し、蛇行が起こる。蛇行河道の湾曲が大きくなって、上流側と下流側の湾曲部が接近すると、蛇行部分を残し河道は直接連なるようになり、その結果蛇行部の部分は本川から分断され、三日月型の湖沼が形成される。三日月湖は河跡湖とも言い、いずれも旧河川の一部が湖沼となったものである。

多くの釣りファンでにぎわう常陸太田市栗原の釣堀は、地元では“栗原の溜^{たまり}”と呼ばれていて、久慈川の蛇行を河川改修によって直線化したため、三日月型に残された沼である。

現在は釣堀だけが湖沼に残っているが、最近まで昔河川であった低地が湿地として残されていた。この地は行政区の境界でもあったため、現在でも釣り堀は、那珂市、常陸太田市に接している。

三日月湖
(常陸太田市, 那珂市)の位置



三日月湖(常陸太田市, 那珂市)の状況 (平成15年11月撮影)

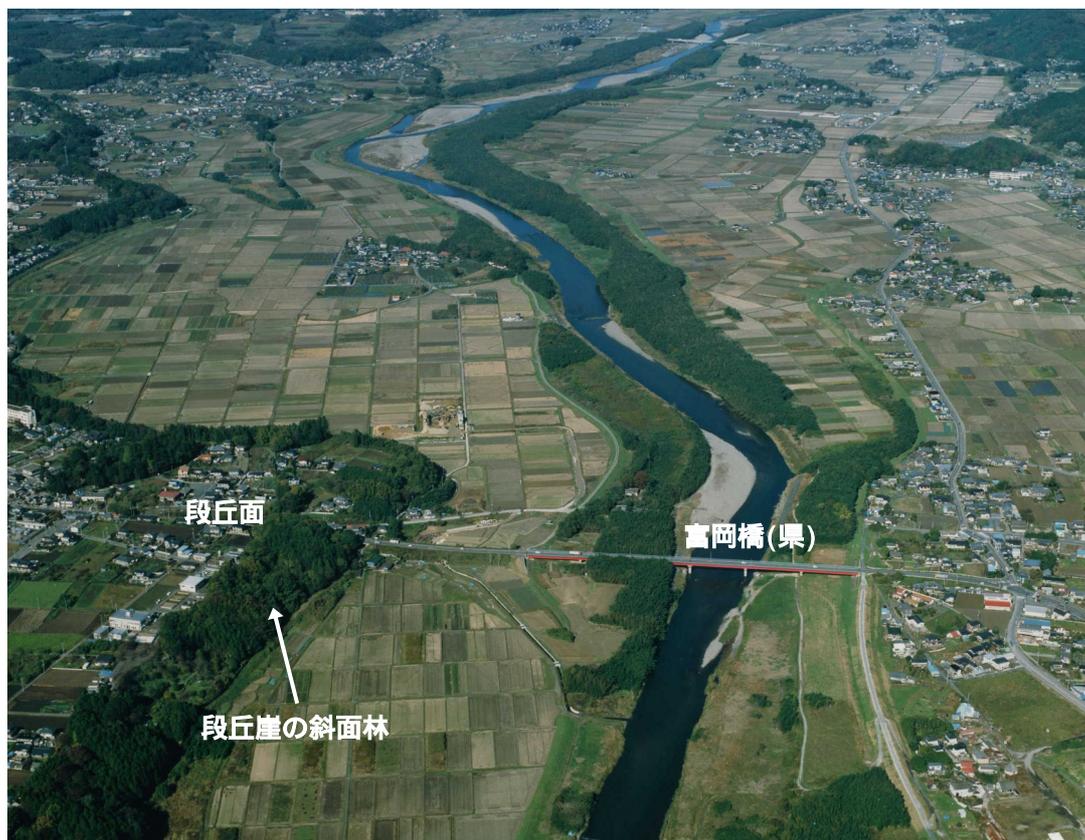
2) 河岸段丘

河川の中下流では、河川に沿って階段状になった地形が見られる。これは河岸段丘と呼ばれている。河の流れが速い上流や中流では、河川は下方侵食により河床は低くなる傾向にあるが、下流域に入り、流速が遅くなると下方侵食の力は衰えて、河の側面を侵食し川幅はどんどん広がり堆積をしながら平坦な河原を形成する。

ここに地殻変動により地盤の隆起や海面の下降などが起き、土地が持ち上がると、河川の侵食力は復活し再び下方侵食が強くなり起こる。その結果土地は削られ崖をともなった1段低い面が形成され、階段状の地形が出来る。この時出来た平坦面を段丘面と言い、崖の部分を段丘崖と呼ぶ。河岸段丘を構成する地質は、上流から運ばれた砂、礫などである。表層は関東ロームなどに覆われているが、排水性がよいことから畑地や集落などに利用されている。

久慈川流域の河岸段丘は常陸大宮市(旧大宮町)付近から見られるが、大きな河岸段丘は右岸の那珂台地に大きく発達している。左岸側では、大きな段丘は形成されていない。

那珂台地と久慈川の低地との境界に見られる段丘崖は、比高20~25mであり、那珂市(旧瓜連町)から河口付近まで続いている。川に面した崖は人が近づき難くまた河原とは異種の植生もあり、ここにはカワセミなどが巣穴を作っていたり、河川環境の中でも貴重な場所といえる。



河岸段丘の写真

(平成15年11月撮影)

